

スタジオ・ポラーノ版
『注文の多い料理店』

原作 宮沢賢治
脚色 澤藤 桂

登場人物

山猫

召使い

ピアノ奏者

鈴木（紳士）

山本（紳士）

一、深い森

荘厳な音楽が流れる中（例えば「牧馬地方の春の歌」を低い音でミサ曲風に）、深い森の中に山猫の不気味なシルエットが浮びあがる。徐々に明るくなると、現れたのは山猫様と二匹の召使い（一人はピアノ奏者）。

山猫 来たぞよ。

召使い 来ました。

山猫 とうとう来たぞよ。

召使い とうとう来ました。

山猫 指折り数えて早三か月。この日をどんなに待ち焦がれていたことか。

召使い 精も根も尽き果てて、あとは朽ちるのを待つばかりだと思っております。

山猫 森はわらわを見捨てなかった。

召使い はい、山猫様。

山猫 森中に警戒態勢を敷くのじゃ。野兎の子一匹、奴らの前に現れぬように。

召使い 畏まりました。

山猫 おや、犬を連れているのう。

召使い 犬を？

山猫 ほら、白熊のような大きな犬を二匹も連れている。わらわは犬は嫌いぞよ。わら

わは犬は嫌いぞよ。

召使い 私も嫌いです。犬はやっかいですから。

山猫 なんとかしておくれ。

召使い なんとかいたしましたしょう。三か月ぶりですから決して逃しは致しません。

山猫 ぬかるんじゃないよ。

召使い は。（去る）

森中の木々や草の音、鳥や獣たちの鳴き声が不気味に響き渡る。

山猫 ホーホホホホ、今夜はご馳走ぞよ。楽しみじや。(高笑いし、「飢餓陣営のたそがれの中」を歌う)

・
飢餓陣営たそがれの中
犯せる罪はいとも深し
あゝ夜のそらの青き火もて
われらがつみをきよめたまへ。

「山猫様、退場。「私は五聯隊の古参の軍曹」が気障っぽく流れる。山猫様と入れ違いに二人の紳士、鈴木と山本がイギリスの兵隊のような服装でさっそうと登場。獣の気配を感じては、様々な方向に銃口を向ける仕草をする。

鈴木 どうだ？

山本 駄目ですね。

鈴木 駄目とは？

山本 実にけしからん森です。

鈴木 けしからんとは？

山本 野兎一匹気配もない。

鈴木 野兎？

山本 ええ。

鈴木 兎なんぞどうでもいい。俺が狙っているのは鹿だ。鹿の黄色な横つ腹なんぞに二三発タンタアーンとお見舞い申すんだ。

山本 そいつは随分痛快でしょうね。

鈴木 くるくるまわって、それからどたつと倒れるのさ。

山本 そりゃあ僕だって野兎なんてケチなこと言わずに、鹿だとか熊だとかトラだとか、大口を叩きたいですよ。だけど現実を見つめてください。僕たちがこれまで見つけたのは、野兎のあの丸い糞、それも干からびたのをたったの三つだけ。

鈴木 だからなんだ。

山本 そんな山に鹿がいると思います？

鈴木 いないのか？

山本 すっかり当てが外れちゃいましたね。季節が悪いのかな？

鈴木 無責任なことを言うな。

山本 なにが無責任なんです？

鈴木 いい猟場があるからって俺を狩りに誘ったのはどこのどいつだ。

山本 言いがかりはよしてください。誘いもしないのに勝手についてきたのは鈴木先輩じゃありませんか。

鈴木 誘いもしないのに勝手についてきた？

山本 そうですよ。勝手に僕んちに来て、勝手にパパの猟銃を持ち出して、勝手に僕のジープの助手席に乗ってここに来たんじゃないやありませんか。

鈴木 俺の優しさが貴様にはわからんのか？

山本 先輩の優しさ？

鈴木 貴様が一人で淋しかろうと、ママとの約束を破ってまで君の狩りに付き合っ
てるってのに。

山本 約束があつたんですか？

鈴木 マルカンデパートでランチの約束をしていたんだがね。

山本 先輩……。

鈴木 やつと君にも俺の優しさがわかったか。

山本 僕は一人で狩りを楽しみたかったんです。

鈴木 なんだって？

山本 僕はとことん一人で狩りがしたかったんです。

鈴木 君はなんて恩知らずな男なんだ。小学校の時、苛められっ子だった君を助けてや
つたこの俺に、誘いもしないのに勝手についてきたなんて。

山本 またその話ですか？

鈴木 またとはなんだ、またとは。

山本 はいはい、その節は大変お世話になりました。

鈴木 君は覚えているだろうかね。君の上履きが女子トイレに隠された日のことを。俺
は女子に成りすまして、君のために上履きを取り返してきてやったんだ。

山本 ありがとうございます。

鈴木 下手すりや俺が苛められっ子になりかねない。今度は俺の上履きが女子トイレに
隠されてしまうかもしれない。その危険を冒してまで俺は君を守ったってのに！

山本 感謝の言葉ありません。

鈴木 そうだろう、そうだろう。

山本 実は僕、本当は友だちと一緒に狩りに出掛けたかったんです。だけど僕には友だ
ちがいない。そんな淋しい僕のために、奥さんとの約束を破ってまで僕につきあ
つてくれた先輩は、まるでお釈迦様のようなでした。

鈴木 よし！

山本 じゃあ、そろそろ犬を呼び戻しましょうか。

鈴木 犬？

山本 獲物を探すために、さつき犬を放したじゃありませんか。

鈴木 そうだそうだ、犬を放していたんだ。奴ら、獲物を見つけたかな？

山本 (口笛を吹く)

猛犬のような恐ろしい鳴き声が遠くから聞こえてくる。その声は徐々に近づき、現
れたのは犬のジョルカエフ(着ぐるみの犬)とタロウ(ぬいぐるみの犬)。

鈴木 おお、ジョルカエフ、俺の愛犬よ、よくぞ戻ってきた。

山本 よしよし、タロウ、いい子だ。

鈴木 (擦り寄るジョルカエフに) 森の様子はどうだった？

ジョルカエフ (ジェスチャーで説明する)

鈴木 なになに「谷を越えて、向うの森まで、走ったが、獲物の気配は、どこにも、なかった。」……なんてこった。
山本 諦めましょう、先輩。今日は日が悪いらしい。

ピアノ奏者、リズムカルに「牧歌」を弾きながら、「牧歌」の替え歌を歌う。替え歌に合わせて踊るジョルカエフ。

深い森の奥の 谷の向うへ行っただけど

獲物の気配はながった ながった

深い森の奥の せ高（だが）の芒（すぎ）あざみ

風に吹かれていたけど 獲物はながった

深い森の奥の 霧の中（なが）を走っただけど

獲物はどこにもながった 雨あふる

と、ジョルカエフ、ピクピクと痙攣し始め、しばらく唸って、そのままひっくり返って倒れる。

鈴木 ジョルカエフ、ジョルカエフ、どうしたんだ、ジョルカエフ！

山本 タロウの様子も変です。

鈴木 ジョルカエフ……。

山本 タロウ……。

鈴木 死んでしまった。

山本 そんな……。

鈴木 これはいったいどういうことなんだ？

山本 二匹が二匹ともいきなり死んじゃうなんて。

鈴木 ……大損だよ、全く。いったいいくらしたと思ってるんだ。

山本 いくらだったんですか？

鈴木 二千四百円。実に二千四百円の損害だ。

山本 僕のは二千八百円です。

鈴木 君はいいよ、いくらだって新しい犬が買えるんだから。それに比べて僕はどうか

い？ ママに隠れて貯めたヘソクリでやっと買ったってのに。

山本 帰りましょう。

鈴木 帰る？

山本 犬がいなければ狩りは無理です。

鈴木 俺はまだ鹿を撃ってない。

山本 取り返しのつかないことが起きそうな、そんな予感がするんです。

鈴木 犬が死んだんだぞ。二千四百円もかけて買った犬が死んだんだ。鹿の頭も撃た

ずに帰れるか！

山本 犬なら新しいのを買ってあげますよ。

鈴木 本当か？

山本 どうせ僕も新しいのを仕入れなくちゃいけませんから、ついでに買っときます。
鈴木 君のより高い犬を頼むよ。
山本 ずうずうしいですね。
鈴木 俺の方が先輩なんだから当然だ。
山本 はいはい、わかりましたよ。

風の音が不気味に聞こえてくる。キーンと鳥の鳴き声。鈴木と山本、悲鳴をあげながら一目散に走る。(その場で精一杯の足踏み……) ジョルカエフとタロウ、静かにハケる。鈴木と山本、息を切らして止まる。

山本 行きましょう。こんなところはもう御免です。この森はなんだか気味が悪い。さつきから誰かがじっと僕らを見ているような気がして落ち着かないんです。

鈴木 俺たちを見ている？

山本 ええ。

鈴木 鹿じゃないのか？

山本 違います。

鈴木 どっちだ？ その鋭い視線はいったいどっちから感じるんだ？

山本 どっちからですよ。あっちからもこっちからも、色んなところから僕らを見ている。

鈴木 いったい何頭いるんだ？ 例え何頭いたとしても所詮俺の敵ではないわい。タンタアーン、タンタアーン、タンタアーン！ 何発でもお見舞い申してやる。(笑う)

山本 鹿じゃありませんよ。戻りましょう。寒くなったし、腹は空いてきたし。

鈴木 確かに腹は空いた。この辺りにレストランでもないものかな。

山本 こんな山の中にレストランなんかあるわけないでしょう。

鈴木 なんて辺鄙なところなんだ。都会派の俺には我慢ならんね。新しい犬も手に入ることになったし、さつさと切り上げよう。行くぞ、山本君。(下手に向かう)

山本 そっちじゃありませんよ。こっちです。

鈴木 こっち？

山本 こっちから来ましたよ。

鈴木 違う、こっちだ。こっちから来た。

山本 向こうに猿の腰掛けが見えるでしょう？ あの下を通ってきたじゃないですか。

鈴木 あの猿の腰掛けは違う。もつとでかい奴だった。それよりあの木、あの木の形。

山本 珍しい木の形だって話しをしたじゃないか。

鈴木 だがそっちは違う。

山本 そっちも違います。

鈴木 じゃああっちだ。

山本 あっちです。

鈴木 ……腹が空いた。

山本 そうですね。

鈴木 腹が空きすぎて横っ腹が痛い。
山本 僕もです。
鈴木 撃たれた鹿の気分だ。
山本 ええ。
鈴木 もう歩きたくない。
山本 同感です。
鈴木 君のせいだ。
山本 は？
鈴木 あの猟師はいったいどこに行ったんだ？
山本 あの猟師？
鈴木 山に入る前に君が雇った地元の猟師だよ。道案内に雇ったのに、いったいどこに消えちまったんだよ！
山本 もういらぬから帰れって猟師に言ったのは先輩でしょうか？
鈴木 なんなんだ、あの猟師は。俺があちちに行きたいって言えばあちちは駄目だ。こちちに行きたいって言えばこちちも駄目だ。全く俺の言うことを聞きやしない。
山本 ですから、腹を立てて猟師を首にしたのは先輩ご自身です。
鈴木 君にはこうなることが判っていたはずだ。だから雇ったんだらう？ 君は彼を首にしようとする俺を止めるべきだったんだ。
山本 先輩が聞く耳つてやつを持っていたら僕だって止めていましたよ。
鈴木 なんでも俺のせいにするんだな、君は。
山本 どう考えても先輩のせいじゃないですか。
鈴木 君のせいだ。
山本 先輩のせいです。
鈴木 君のせいだよ！
山本 先輩のせいですよ！
鈴木 もう止めましょうよ。どなったって腹は膨れません。膨れないどころかますますひもじくなるだけです。
山本 トンカツが食いたい。
鈴木 トンカツ？
山本 千切りキャベツに乗ったトンカツに、ブルドックソースをたっぷりかけて食いたい。豚は白金豚がいいな。油の乗った白金豚。白金豚のトンカツ、白金豚のトンカツ。花巻名物白金豚のトンカツ！
山本 止めてください、トンカツの話なんて。
鈴木 いいじゃないか、トンカツの話くらい。
山本 僕だってトンカツは食べたい、庶民の洋食かもしれないませんが、今は喉から手が出るほど食べたいですよ。だけど、今この場で食べられないトンカツの話をしたって虚しくなるだけじゃありませんか！
鈴木 山本君……。
山本 すみません、言い過ぎました。

鈴木 君は喉から手が出るのか？
山本 出ません。
鈴木 出るって言ったじゃないか。喉から手が出るほど食べたいって。
山本 言いましたよ。
鈴木 喉から手を出してみろよ。
山本 出ませんよ。
鈴木 言っただろう、喉から手が出るって。
山本 言いましたよ。
鈴木 だったら喉から手を出してみろって言ってんだよ。
山本 出せませんってば。

風がどうと吹いて、草はざわざわと、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴る。
「太陽マヂックのうた」が不気味に流れる中、二人の後ろに西洋造りの家の扉が現れる。扉はお盆の上に建てられており、二人が扉を開けて中に入る度に、山猫様と召使いがお盆を百八十度廻す。「西洋料理店山猫軒」という看板が掲げられている。二人はゆっくりと後ろを振り返る。

鈴木 家だ……。
山本 家ですね……。
鈴木 西洋料理店山猫軒。
山本 西洋料理店？
鈴木 君はさつき、こんな山の中にレストランなんかあるわけないと聞いたね。
山本 言いましたね。
鈴木 あったよ、君。
山本 ありましたね、先輩。
鈴木 レストランだよ、君。
山本 レストランですね、先輩。
鈴木 なんて立派な店構えなんだ。
山本 おかしいですね。
鈴木 なにがおかしいんだ？
山本 こんな山奥に、一流料理店とも違わぬ店構えのレストランなんて、おかしくないですか？
鈴木 そうか？
山本 どう考えてもおかしいですよ。
鈴木 とにかく入ってみよう。料理店って看板を掲げているんだから、なにか食事くらいはできるんだろう。
山本 そうですね。
鈴木 トンカツだってあるかもしれないぞ。

二、第一の扉

二人は戸口へ向かう。扉には文字が書いてある。

鈴木　なんか書いてあるな。

山本　「どなたもどうかお入りください。決してご遠慮はありません」

鈴木　こいつはどうだ、やっぱり世の中うまくできてるねえ。今日一日難儀したけれど、今度はこんないいこともあるときた。

山本　いいこと？

鈴木　このうちは料理店だけど、ただでご馳走するんだぜ。

山本　どうしてですか？

鈴木　よく読んでみるよ。

山本　「どなたもどうかお入りください。決してご遠慮はありません」

鈴木　つまり、「決してご遠慮はありません」ってのがその意味だ。

山本　そうですか？

鈴木　ほかにどんな意味があるってのさ。遠慮せずに来てくれと言って呼んだ友人から君は食事代を取るのかい？

山本　そんなことはしません、だけど、我々は友人ではありません。見ず知らずの我々に、どうしてただでご馳走してくれるんでしょうか？

鈴木　俺が考えるに、この店は最近できて、これから流行らせようと思っているのさ。我々にただでご馳走して評判がよければ、我々の知り合いが口コミでこの店にくるだろう？ それを狙っているんだよ。

山本　そうか、そういうことか。

鈴木　そういうことだ。さあ、入ろう。ただでご馳走にありつけるとは得をしたよ。

二人は扉を開けて中に入る。「大菩薩峠の歌」が流れる中、山猫様と召使いが登場する。

山猫　やっと入ったぞよ。

召使　やっと入りましたね。

山猫　これから勝負ぞ。

召使　承知しております。

山猫　三か月前もここまでは順調だったのじゃ。

召使　今度は準備万端です。決して失敗はいたしません。

山猫　頼もしい言葉じゃ。どんな料理にしようかねえ。……ハンバーグ？ フライ？ それともシチュー？ グリル？ ポワレ？ 悩むぞよ……。 (キノコ採りをする召使いに気づく) お前、なにをしているのかえ？

召使　見ての通りキノコ採りです。今夜のダイナーの付け合せにしようと思いましたがね。

山猫　キノコはキノコでもまさかそれは、ワライダケ……。

召使　山猫様はお目が高い。その通り、ワライダケでございます。

山猫　ワライダケ……食べると三日三晩笑い続けるという、ああ、世にも恐ろしい毒キ

ノコ。……お前、三日前もそれをわらわに食べさせたのう。

召使い 三日前は付け合せではなくメインでした。

山猫 お陰でわらわは三日三晩笑い続けるはめになったねえ。

召使い はい、とても楽しそうでした。

山猫 (笑ってみせる) 腹がよじれて千切れるかと思ったぞよ。やっと今朝その地獄から解放されたつてのに。

召使い 地獄だなんて、とっても楽しそうでしたよ。

山猫 楽しいわけあるかい、このボケ！ こっちは死にそうだったんじゃ！

召使い ……ボケってどういうことですか？

山猫 え？

召使い (水戸黄門の印籠のように懐から退職届を取り出して) これはなんでしょう？

山猫 なんじゃ？

召使い 退職届です。

山猫 タイ焼き職人？

召使い 今この瞬間をもって山猫様の召使いを辞めさせて頂きます。

山猫 タイ焼き職人？

召使い 退職届です。

山猫 お前が辞めちゃったら誰が料理をするのじゃ？ 誰がワインを注いでくれるのじゃ？ 誰がテーブルセッティングをするのじゃ？

召使い すべてご自身でやってください。

山猫 無理じゃ無理じゃ。お前は勘違いをしておるぞ。わらわはお前のことをボケと言ったのではない。自分のことをボケと言ったんじゃ。山猫様のこのボケとな。

召使い 自分のことを？

山猫 そうじゃ、お前の勘違いじゃ。このボケ、山猫様のこのボケ！ ボケ！ ボケ！ (と自分の頭を拳でコツコツ叩いてみせる)

召使い ……わかりました。今日のところはそういうことにして差し上げましょう。

山猫 本当か？

召使い だけど、今度「このボケ！」なんて台詞を吐いたら、ただじゃ済みませんからそのつもりで。

山猫 ほらほら、早くメニューを決めようぞ。ハンバーグ？ フライ？ シチュー？ グリル？ ポワレ？ どうするどうする？

召使い ハンバーグなんて、ミンチするのが面倒です。

山猫 じゃあフライかえ？

召使い フライなんて、小麦粉振って卵つけてパン粉をまぶすなんて、どれだけ手間がかかると思ってるんです？

山猫 グリルでもいいぞよ。

召使い だいたい火を起こすのが大変なんですよね。

山猫 それじゃあ火を起こさないメニューを考えるぞよ、なにがあったかのう……。そうじゃ、サラダにするぞよ。サラダなら洋食だし火を起こさなくて済むぞよ。どうじゃ？

召使い いいでしょう、サラダですね。

山猫 きっとお客様も喜ぶぞよ。

召使い ではさっそく。

山猫 下ごしらえを始めるぞよ！

山猫様と召使い、お盆を廻す。「私は五聯隊の古参の軍曹」が楽しそうに流れる。扉の中に入った鈴木と山本が姿を現す。扉の内側に文字が書いてある。

山本 (扉を閉めながら扉の内側の文字を読む) 「ことに肥ったお方や若いお方は、大歓迎いたします」どういうことだろう？

鈴木 肥った奴とか若い奴はモリモリ食うだろう。たくさん食べて欲しいのさ。

山本 どこまでも気前がいいんですね、この店。期待に応えられるだけ食べられるでしょうか？

鈴木 今の俺ならできる。俺を招き入れたことを後悔させないだけの自信がある。つまり、俺は大歓迎にあたっていているってことだ。

山本 なにを食べさせてくれるんだろう。

鈴木 もちろん肉さ。モリモリ食べるには肉が一番だ。

山本 肉料理か。牛フィレ肉かな、子羊もいいな。鴨肉なんてどうです？

鈴木 いやいや君、白金豚のトンカツだよ、トンカツ。

山本 先輩、さっきはすみませんでした。

鈴木 なんだよ、急に。

山本 白金豚のトンカツの話に逆上したり、喉から手が出るなんて嘘を吐いたり。

鈴木 いいよ、そんなこと、すっかり忘れてたよ。

山本 許してくれるんですか？

鈴木 許すもなにも、俺もムキになったりして大人気なかったと反省してるんだ。

山本 先輩……。

鈴木 泣くなよ、山本君。せっかくの白金豚のトンカツが塩味になっちまうぜ。

三、第二の扉

二人の会話の間、再びお盆が廻り、別の扉が現れる。その扉にもまた文字が書いてある。

山本 また扉だ。

鈴木 扉の多い家だな。

山本 変ですね、どうしてこんなにたくさん扉があるんだろう？

鈴木 ロシア式だよ。寒いところや山の中はみんなこうさ。

山本 なるほど、冷気をうちの中に入れていたための工夫なんですね。(扉を開けようとして扉の文字に気が付く)「当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこはご承知ください」

鈴木 注文の多い料理店か。

山本 なかなか流行っているんですね。

鈴木 そのようだな。

山本 こんな山の中なのに誰が来るんだろう？

鈴木 東京だってそうだろう、一流の料理店は大通りには少ない。

山本 そういえばそうですね。僕の行く料理店も、たいていは大通りから路地にちよつと入ったところにありますよ。

鈴木 だろう？

二人は扉を開けて中に入る。「月夜のでんしんばしらの軍歌」が元氣流れる中、山猫様と召使いがさっそうと行進しながら登場する。

山猫 首尾は？

召使い 上々です。ここまではすべて思惑通りに言葉を解釈してくれています。しかも一

点の疑問も抱いていない。

山猫 素晴らしいのう。これまで積み重ねてきた甲斐があったぞよ。

召使い このまま進めばサラダの成功は間違いありません。

山猫 ねえ、お前、白金豚ってなんだろうねえ？

召使い 白金豚？

山猫 お客様たちったら、さつきから白金豚のトンカツ、白金豚のトンカツって言うるんじや。なんだろうねえ、白金豚って。

召使い 山猫様は白金豚をご存じない。

山猫 知らないぞよ。

召使い 白金豚と申しますのは、豚の品種でございますよ。

山猫 豚の品種？

召使い 岩手県花巻地方で飼育されている最高級ブランド豚でございます。かの宮沢賢治が『フランドン農学校の豚』という作品の中で、主人公の豚の肉を白金（ハッキン）いわゆる白金（シロガネ）に例えたところから、白金豚という名前がつけられました。

山猫 ほう。

召使い 残酷な話なんです。

山猫 残酷？

召使い 宮沢賢治は、動物を殺して食べるということに、常に疑問を抱いていました。人間は米や大豆や野菜を食べて生きられるんだから、わざわざ動物を殺して食べるくてもいいんじゃないかって、そう思っていました。そこで、この『フランドン農学校の豚』という作品で、殺される豚の気持ちを描いたんです。

山猫 殺される豚の気持ち？

召使い そうです。飼育されながら、みんなに「うまそうな肉だ」と思われて生きる豚の切なさ。

山猫 切ないのう。

召使い 殺されることが決まって、生きる気力をなくした豚の辛さ。

山猫 辛いもう。

召使い その豚さんのために黙とう。

山猫と召使い、一瞬黙とうする。

山猫 さあ、下ごしらえの続きをしようぞよ。

召使い 畏まりました。

山猫様と召使い、お盆を廻す。「私は五聯隊の古参の軍曹」が元氣よく流れる。扉の中に入った鈴木と山本が姿を現す。扉の内側に文字が書いてある。

山本 (扉を閉めながら扉の内側の文字を読む) また書いてある。「注文はずいぶん多い

でしょうがどうか一々こらえて下さい」 どういう意味でしょう？

鈴木 説明しよう。

山本 よろしくお願いします。

鈴木 注文があまり多くて支度が手間取るけれどもごめん下さいと、こういうことだよ。

山本 そんなこと一々断らなくてもいいのに。

鈴木 こういう細かな気配りが、二度三度とお客に足を運ばせる原動力になっているんだ。

山本 そうなんですか？

鈴木 ウェイターの態度が悪い料理屋なんぞに二度も来たいと思うか？ いいか、そんな料理屋じゃ、どんなにうまい料理を食ってもまずいと思えな。うまいとかまずいってのは半分は気持ちの問題なんだから。

山本 なるほど。

鈴木 常識だよ、君。

山本 先輩のお言葉にはいちいち含蓄がありますね。

鈴木 まあね。

山本 僕なんてウェイターの態度が悪い料理屋つてのに遭遇したことがないから、全然知りませんでした。

鈴木 ウェイターの態度が悪い料理屋に遭遇したことがない？

山本 料理屋に行くときたいはいはすぐに一番奥のテーブルに通されて、注文しなくてもシェフのお勧め料理が次から次へと出てくるもんで。

鈴木 なんだと？

山本 それに、ウェイターじゃなくて支配人やおかみか直接対応してくれるんで、ほとんどはずれがないんです。

鈴木 そうか、そういうことか。

山本 どういうことですか？

鈴木 俺が入り口近くのテーブルに通されるのも、俺のテーブルにアジの開きが出てくるのも、全部貴様のせいだったんだ。

山本 僕？

鈴木 俺が通されるはずの奥のテーブルを貴様が占領し、俺が食うはずのコロッケを貴様が食っていたんだ。

山本 誤解です。

鈴木 誤解もへったくれもあるか！ どこだ、その料理屋は！ いった、貴様がその料理屋に行ったのは！ 俺がそのひん曲がったブルジョア世界を叩き切ってやる！ 僕はコロッケやアジの開きがメニューにあるような大衆食堂には行きませんよ。

鈴木 大衆食堂だと？

山本 落ち着いてください。うまいとかまずいってのは半分は気持ちの問題なんですよ？

鈴木 俺がこれまでうまいはずの料理をまずく食う破目になったのは、貴様のような輩が料理屋という料理屋を牛耳っていたからだ！

山本 そんなに憤慨していたら、うまいはずの白金豚のトンカツまでまずくなっちゃいます。

鈴木 白金豚のトンカツ？

山本 これからうまい白金豚のトンカツを食うんでしょう？

鈴木 そうだな、白金豚のトンカツを食い終わるまでは、あの屈辱を忘れてやってもいい。

山本 食べ終わったら思い出すんですか？

鈴木 当たり前だ！

四、第三の扉

二人の会話の間、再びお盆が廻り、別の扉が現れる。扉のわきには鏡がかかっており、その下の小さな棚には長い柄のついたブラシが置いてある。そしてまた、その扉にもまた文字が書いてある。

山本 さあ、次の扉ですよ、先輩。

鈴木 今度はなんだ。

山本 「お客様方、ここで髪をきちんとして、それからはきものの泥を落としてください」

鈴木 こいつはどうも尤もだ。

山本 僕もさつき玄関で、山の中だと思って見くびったんですよ。ブーツの泥さえ落とさずに入ってしまった。

鈴木 俺もだ。作法の厳しい家だな。

山本 きつとよほど偉い人たちが度々来るんでしょうね。

鈴木 そうなのか？

山本 いいレストランってのはお客を選ぶんです。他のお客に迷惑がかかるから、変な客は入れないんですよ。

鈴木 なるほど、よほど偉い人たちが度々来るのか。

二人は髪を整え、ブーツの泥を落とし、鏡でそれぞれ自分の身支度を確認する。それから互いに襟や帽子の被り方を直してやったりする。その最中に、召使いがこっそり現れ、ブラシを持って出て行く。二人、気配を感じて振り向き、消えて行く召使いの姿を一瞬見てしまう。顔を見合わせる。

鈴木 き……消えた。

山本 ブラシが消えました。

二人、慌てた様子で扉を開けて中に入る。山猫様と召使いがお盆を廻す。「私は五聯隊の古参の軍曹」がちよっと不気味に流れる。扉の中に入った二人がまた姿を現す。扉の内側にもまた文字が書いてある。

山本 僕は腹が空きすぎています。

鈴木 ああ、空腹すぎて錯覚を見た。

山本 (扉の内側の文字を見つけて) 「鉄砲と弾をここに置いてください」
鈴木 なんですか？

山本 鉄砲を持って物を食うという法はありませんからね。

鈴木 大丈夫なのか？

山本 なんの心配です？

鈴木 こんなところに鉄砲を置いてって、誰かに盗られやしないだろうか。金庫でもあるんなら別だが。

山本 高級レストランでそんな物騒なことは起こりませんよ。

鈴木 なぜそう言い切れる？

山本 信用が第一ですから。よほど偉い人たちが始終来るようなレストランは、ほとんどがこの方式ですね。

鈴木 この方式？

山本 入り口で鞆やらなにやら、たいていの荷物を預かります。食事は身軽に楽しまな
くちや。

鈴木 よほど偉い人たちが「始終」来るのか？

山本 そうでしょうね。

鈴木 君はさつき、よほど偉い人たちが「度々」来るって言ってたぞ。

山本 訂正します。これだけのレストランなら「度々」どころじゃない、「始終」来ていると断言できますよ、僕は。

鈴木 そうか、よほど偉い人たちが始終来ているのか。

それぞれ鉄砲をフックにかけ、革帯を棚に乗せる。

山本 よほど偉い人たちも狩りを楽しんだ後にここに立ち寄るんだろうな。

鈴木 わざわざ鉄砲置き場まで用意しているくらいだからな。

山本 狩りは紳士のたしなみですから。
鈴木 まあな。

山本 鹿やら熊やらを山ほど撃って、ここで食事を楽しんで、それから悠々と帰るんだ。
鈴木 撃った鹿や熊はどうするんだ？

山本 当然下男が持ち帰ります。

鈴木 持ち帰った後だよ。頭は剥製にして書斎に飾るとして、よほど偉い人たちは鹿の胴体をなかに使うのさ？

山本 黒テンやリンクスなら毛皮にしても価値がありますが、鹿や熊の毛皮の襟巻きなんて僕は聞いたことがありませんね。

鈴木 食うのかな？

山本 庶民は食べるらしいですけどね。

鈴木 庶民の話なんかしてないよ。

山本 高級料理店じゃ鹿肉とか熊肉つてのにはまずお目にかからないですね。肉料理といえば子羊の頬肉のロースト、鴨肉のグリル、牛フィレ肉のポワレ、まあこの辺りが定番ですね。

鈴木 ポワレ？

山本 ポワレですよ、ポワレ。

鈴木 なんだそれ。

山本 ポワレをご存知ないんですか？ ポワレは紳士の代名詞みたいなものですよ。

鈴木 紳士の代名詞……ああ、あれか、あれね、ポワレか。そうか、ポワレはいいね、ポワポワしていてね、うん、なかなかいいよね。

山本 よかった、先輩がポワレをご存知で。

鈴木 で、そのポワレを食うつてことはだ、鹿の胴体はどうするんだ？

山本 よほど偉い人たちはきつと、捨てるんでしょうね。

鈴木 捨てるのか？ そうだよな、俺も鹿の胴体をどう始末しようかと悩んでいたんだが、そうか、捨てればいいのか。

五、第四の扉

二人の会話の間、再びお盆が廻り、別の扉が現れ、また文字が書いてある。

山本 「どうか帽子と外套と靴をおとり下さい」

鈴木 帽子と外套と靴だって？

山本 そう書いてあります。

鈴木 なんだよ、ブーツを脱ぐならわざわざブーツの泥を落とさせる必要はなかったんじゃないのか？ どういうつもりだ、え？ いったいどういうつもりなんだ！

山本 扉に文句を言っても仕方がありませんよ。

鈴木 しかしだね、君、ここでブーツを脱ぐんなら、なんだってさっきの扉でブーツの泥を落とさせたんだ。いったいどこにその必然性があったというのだ。

山本 そういっしきたりなんですよ、きつと。

鈴木 どういうしきたりなんだ、いったい？ 扉の分だけ文句を書くのがしきたりなのか？ それとも文句の分だけ扉を用意するのがしきたりなのか？

山本 怒っても仕方ありませんよ。どうします？ 脱ぎますか？ 脱ぎませんか？

鈴木 ……。

山本 脱がずに戻りますか？ たかがブーツの矛盾に対する怒りのためだけに、目の前にぶらさがっている白金豚のトンカツを諦めますか？

鈴木 くそ！ 脱ぐよ、脱いでやるよ。よっぽど偉い人なんだろう、奥に来ているのはさ！

二人は帽子とオーバーコートをフックにかけ、ブーツを脱いで扉を開けて中に入る。中に入ったあとも、ブーツのことをグチグチ言ってる声が聞こえる。「牧馬地方の春の歌」しんみりと流れる中、山猫様と召使いが登場する。

山猫 なにをグチグチ言ってるのかえ？

召使い ブーツのことでかなり怒っていましたよ。

山猫 ブーツがどうしたのじゃ？

召使い さっきの扉でブーツの泥を落とさせたじゃありませんか。

山猫 サラダに泥は不要ぞよ。

召使い 今度の扉ではブーツを脱がせた。

山猫 サラダにブーツは不要ぞよ。

召使い だったら最初からブーツを脱がせばよかったんじゃないやありませんか？

山猫 お前、わらわがミスをしたとでも言いたいのかえ？

召使い ミスとまではいいませんがね、こういうのはちよつとした油断が命取りになりますから。

山猫 お前こそ、ブラシのくだりでおお客様方に姿を見られちまったくせに。

召使い あれは事故です。

山猫 こういうのはちよつとした油断が命取りになるっていうのになえ。

召使い 私のせいですか？

山猫 お前のせいだね。

召使い 「やだ、わらわのキュウテイクルヘアーがからまっちゃったわよう、お前、ブラシを持ってきておくれよう」と私に懇願されたのは誰でしょう？

山猫 誰？

召使い 山猫様です。

山猫 わらわ？

召使い そうです。

山猫 そんなことあったかのう？

召使い ありました。

山猫 それじゃあ二人のせいってことにしようかのう。罰として二人でブーツの臭いを嗅ぐのはどうかえ？

召使い 嫌です。

山猫 (鈴木らが置いて行ったブーツの臭いをかぐ) なんだか懐かしい感じがするのう……。

召使い 懐かしい？

山猫 なんじやろうのう、この胸がドキドキする感覚は……。

召使い 牛に知り合いでもいましたか？

山猫 牛の知り合い？ いるぞよ。小岩井農場に住んでいる牛のモー君。とってもハンサムなんじや。わらわの初恋の人。もう五年も会ってないのう。サラダを食べて元気になったら会いに行こうかのう。

召使い そのブーツ、牛革のようですね。

山猫 牛革？

召使い つまり牛の革。

山猫 ……まさか……モー君？ このブーツ、モー君かえ？ ……この香り、この肌触

り、そしてビロードのような美しい色合い、モー君ぞよ……。このブーツはモー君ぞよ。モー君、モー君、わらわじゃ、山猫じゃ、モー君、返事をしておくれ！
ブーツは返事をいたしません。

山猫 モー君なのに？

召使い モー君ではありません。かつてモー君だったブーツです。

山猫 モー君がブーツになるなんて……。

召使い 小岩井農場といえは、原っぱで放し飼いにされている羊たちがいるのをご存じですか？

山猫 知ってるぞよ。

召使い 観光客は、その羊たちと戯れたあとにジンギスカンを食べるそうです。誰かこの矛盾に気がつかないんでしょうか。

山猫 モー君は観光客と戯れることすらできなかった。牛じゃからのう。

召使い 我々だって、いつ三味線にされるかわかりません。

山猫 三味線？

召使い 三味線には、猫の皮を張るととてもいい音がでるそうですよ。

山猫 わらわは三味線にはならないぞよ。三味線になんかなるもんか。モー君、天国から見ていておくれ。わらわはきつと、おいしいサラダを作ってみせるぞよ！

山猫様と召使いがお盆を廻す。「私は五聯隊の古参の軍曹」がイライラ気味に流れる。扉の中に入った二人がまた姿を現す。扉の内側にもまた文字が書いてある。扉のわきには黒塗りの金庫が置いてある。

山本 (ため息をつきながら) 「ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡、財布、その他金物、ことに尖ったものは、みんなここに置いてください」

鈴木 カフスボタン？

山本 眼鏡もです。

鈴木 鉄砲はわかる。外套も帽子もブーツも理解はできる。しかしだ、カフスボタンは無理だ。いくらなんでも俺の理解の範疇を越えている。カフスボタンだぞ、カフ

スポタン。

眼鏡もです。

山本 カフスポタンは紳士のたしなみだ。カフスポタンなくして紳士と言えるか？

山本 ネクタイピンはなくてもいいんですか？

鈴木 カフスポタンだけは俺は譲れんぞ！

山本 ちゃんと金庫がありますよ。

鈴木 そういう問題じゃない。

山本 奥に来ている偉い人たちもここを通ったんですよ？

鈴木 当たり前だ。偉い人が裏口から入るもんか。

山本 だとしたら、偉い人たちもカフスポタンをはずしているわけですよ？

鈴木 当たり前だ。ここを通ったんだから。

山本 偉い人がカフスポタンをはずしたのに、先輩はカフスポタンをはずさないんですか？

鈴木 偉い人がカフスポタンをはずしただと？

山本 そうですよ、先輩の理屈から言ったら。

鈴木 偉い人がカフスポタンをはずすことがあり得るのか？

山本 だから、そういう解釈になるんじゃないませんか？

鈴木 そうか、偉い人がカフスポタンをはずしたのか。

山本 で、先輩はどうされるんですか？

鈴木 はずすよ、はずすに決まってるだろう、偉い人がカフスポタンをはずしたんだ、俺がはずさない道理があるか。

それぞれ、眼鏡をはずしたりカフスポタンをとったりして金庫に入れる。

山本 電気じゃないですかね。

鈴木 電気？

山本 なにかの料理に電気を使うとみました。金気のものはない、ことに尖ったものは危ないと、そういうことではないでしょうか。

鈴木 なるほどな。

六、第五の扉

二人の会話の間、再びお盆が廻り、別の扉が現れ、また文字が書いてあり、扉の前には壺が置いてある。

鈴木 これでいくつ目だ？

山本 え？

鈴木 扉だよ、扉、これでいくつ目だよ？

山本 最初の扉と、注文が多いのを断った扉と、ブーツの泥を落とした扉と、ブーツを脱いだ扉だから、五つ目ですね。

鈴木 鉄砲を置いた扉もあったろう。
山本 それは三つ目の扉の裏ですね。

鈴木 どうする？
山本 どうするって？

鈴木 俺たちは狐に騙されているんじゃないのか？
山本 狐？

鈴木 田舎じゃ狐が人を騙すそうだからね。この扉の向こうはきっと外だ。俺たちは狐に騙されているにちがいない。

山本 それじゃ戻るんですか？
鈴木 狐料理だ。

山本 狐料理？
鈴木 俺たちの食卓に出される予定の狐が、最後の足掻きで俺たちを騙しているんだ。

山本 つまり、僕たちが扉をすべて開け終わると、電器でこんがり焼けた狐が皿に乗って出てくるわけですね。

鈴木 そういうことだ。早く読めよ。
山本 「壺のなかのクリームを顔や手足にすっかり塗ってください」だそうです。

鈴木 クリーム？
山本 牛乳のクリームらしいですね。

鈴木 なんでクリームなんか塗るんだ？
山本 外が非常に寒いですからね、部屋のなかがあんまり暖かいとひびがきれるからその

鈴木 予防なんですよ、きっと。
山本 至れり尽くせりだな。
鈴木 よかれと思つて色々と気をまわしてくれているんですね。

鈴木 わかった、貴族だ。
山本 貴族？

鈴木 偉い人だよ。きっと貴族さ。案外俺たちは貴族と近づきになれるかもしれないな。
山本 そしたら商売にも箔がつくつてもんだ。

山本 なるほど、貴族か。その可能性はありますね。
鈴木 (クリームを塗り終わり) こんなところでどうだ？

山本 いいんじゃないですか？
鈴木 うん、完璧だ。君の顔は変だ。

鈴木 先輩の顔も変ですよ。
山本

扉を開けて中に入る。山猫様、「黎明行進歌」を歌いながら元気よく登場する。

起てわが気圏の戦士らよ 暁すでに やぶれしを

いま角礫のあれつちに リンデの種をわが播かん。

とりいれの日は遠からず 微風緑樹の 莊厳と

禾穀の浪は きららかに 歓呼は天も 応へなん。

山猫様と召使いがお盆を廻す。「私は五聯隊の古参の軍曹」がおもちや箱をひっくり返したみたいに流れる。扉の中に入った二人がまた姿を現す。扉の内側にもまた文字が書いてあり、小さな壺が置いてある。

山本 「クリームをよく塗りましたか、耳にもよく塗りましたか」そうだ、僕は耳には塗らなかつた。危なく耳にひびを切らすとこでしたよ。(慌ててクリームを耳に塗る)

鈴木 (クリームを耳に塗りながら) この主人は実に用意周到だよ、まったく細かいところまでよく気が付きますよね。

鈴木 そろそろご馳走にありついてもいい頃じゃないか？

山本 そりやそうですね、もうはずす物はなにもないし、塗りたくるものだってないはずだから。

鈴木 これ以上身につけている物はずしたら裸になっちゃう。

山本 わかりませんよ、貴族つてのは裸で食事をする習慣があるかもしれません。

鈴木 勘弁してくれよ。

山本 次はこうです、髪を切ってください、髭を剃ってください、爪を切ってください。

鈴木 髪を切るくらいなら、なんで最初に髪を整えさせたんだ。

山本 ブーツの泥を落とさせておきながらブーツを脱がせたくらいですからね、ないとは言いいけません。

鈴木 こうなったらとことん付き合おうか。

山本 ご馳走にはなにがなんでもありついてやりますよ。

七、第六の扉

二人の会話の間、再びお盆が廻り、別の扉が現れ、また文字が書いてある。棚には香水の瓶が置いてある。

山本 「料理はもうすぐできます。十五分とお待たせはいたしません。すぐ食べられます。早くあなたの頭に瓶の中の香水をよく振りかけてください」やっとうゴールが見えてきましたね。

鈴木 香水か、こいつは思いつかなかつた。

山本 確かに貴族は香水を振りかけていますからね。

鈴木 次は粉を叩いて紅を塗ってくださいとでも出てくるかな。

鈴木、香水をめいっぱい振りかける。

山本 (匂いを嗅いで) 酔の匂いがありますね。

鈴木 間違えたのさ。下女が風邪でもひいて間違えて入れたんだろう。まったく、どこに行っても無教養な下女には悩まされるねえ。

山本 こんなに酔の匂いがプンプンしてたら、貴族の方々に誤解されるんじゃないかな。

鈴木 誤解って？

山本 乞食ってなんだか酸っぱい臭いがするでしょう？

鈴木 まあな。

山本 貴族の方々に変に誤解されるのは嫌だな。

鈴木 今さら言うなよ、めいっばいかけちまったじゃないか。

山本 先輩はいいですよ。

鈴木 なにがいいんだよ。

山本 誤解されてもダメージは少ないじゃないですか。

鈴木 なんだと？

山本 先輩の場合は僕ほど乞食との格差があるわけじゃないから。

鈴木 意味がよくわからんぞ。

山本 察してくださいよ、オブラートに包んで言ってるんですから。

鈴木 オブラートに包まずに言えよ。

山本 ですから僕の場合は、爺さんの代から貴族のスポーツである狩りを嗜んでいるよ

うな家柄じゃないですか。それに反して先輩の場合は、昨日今日初めて狩りを経験したくらいで紳士ぶってるただだの庶民です。

鈴木 ただの庶民だと？ 貴様なんか成金じゃないか。

山本 成金ですよ。成金ですとも。成金ですから金なら馬に食わせるほど持ってますけ

鈴木 どなにか？

クソ！

山本 つまり、成金である僕んちは貴族に限りなく近いけど、先輩んちは庶民ですから、

どちらかというと乞食に限りなく近い、乞食同然と言っても過言ではない、下手すりゃ乞食以下ということもあり得る。結果、乞食に間違えられても間違いと言

い切れるほどのなものをも持ち合わせていないわけですから、酸っぱくても構わないとこういうことですよ。

鈴木 決闘だ！

山本 決闘ですか？

鈴木 そうだ、怖気づいたか！

山本 いえいえ、庶民である先輩が本来の決闘の意味がおわかりになっているのか、少々疑問を持っただけですよ。

鈴木 決闘の意味くらいわかっるとる。

山本 やるんですね。

鈴木 もちろんだ。

山本 望むところですよ。で、僕んちの流儀でいいですよね？

鈴木 僕んちの流儀？

山本 先輩のうちに決闘の流儀があるんならそれでも構いませんが。

鈴木 ないよ。

山本 でしょうね。僕んちには二つの流儀がありますけど、どっちにします？

鈴木 どっちもこっちも、どういう流儀なのかを先に言えよ。

山本 一つは剣で行うやつです。死ぬか殺すか二つに一つ。最も決闘らしい決闘です。

鈴木 剣なんかどこにあるんだ。

山本 そういう時のために、もう一つの流儀はこれです。(紙相撲の人形を取り出す)
なんだ、これ？

山本 知らないんですか？ 紙相撲です。

鈴木 紙相撲くらい知ってるよ。

山本 これで決闘するんです。

鈴木 地味だな。

山本 そういう意見を考慮して、巨大紙相撲を用意しました。(大きな紙相撲の人形を持つてくる)

鈴木 どっから持ってきたんだよ。

山本 マワシの色はどっちがいいですか？

鈴木 もちろん金だ。

山本 そう言うと思って、金のマワシの方に「鈴木山」と書いておきました。

鈴木 俺は貴様に見透かされるほど単純じゃない。

山本 見透かされたくせに。

鈴木 クソ！

山本 いきますよ。

鈴木 来い。

山本 手について、はっけよい……。

「応援歌」が流れる。鈴木と山本、「のこったのこった」と言いながら紙相撲をする。どっちかの紙相撲が倒れて終了。

鈴木 でかくても地味だったな。

山本 そうですね。

二人は扉を開けて中に入る。料理番組のテーマ曲が流れ、召使いが車のついたキッチン台を転がして登場。台の上にはミニチュアの人間と調味料の入れ物、菜っ葉の乗った皿が置いてある。召使いはそれぞれの材料を適当に観客に見せながら料理の解説していく。

召使い 三分クッキングの時間です。今日は人間のサラダの作り方をご紹介します。材料は人間を二人、これはできれば太った人間や若い人間がいいでしょう。牛乳のクリームを適量、酢、少々、塩、大量、そして菜っ葉です。まず人間の体についた埃や泥をブラシや手ぬぐいを使って綺麗に洗い落とします。(ミニチュアの人間の埃を適当にとる)そして、鉄砲や弾丸、帽子、外套、ブーツ、ネクタイピン、カフスボタンなど、食べられない部分を取り除きます。(着ている物などを脱がす)次に牛乳のクリームをたっぷり塗ります。ここで手を抜くとおいしいサラダになりませんから気をつけてくださいね。(クリームを塗る)牛乳のクリームを惜しみなく塗ったら、酢を少々振り掛けます。(酢を振り掛ける)最後の仕上げは、等

身大でお楽しみください。

山猫様、登場。

山猫 どうとう最終段階にさしかかろうとしている。完璧な下ごしらえぞよ。

召使い あとは塩をもみ込むだけです。

山猫 最高級サラダには最高級ワインが必要じゃ。

召使い ご用意してございます。

山猫 頬が落ちぬよう気をつけねばのう。

召使い、キッチンセットを片付ける。山猫様と召使いがお盆を廻す。「私は五聯隊の古参の軍曹」が静かに流れる。扉の中に入った二人がまた姿を現す。扉の内側には大きな文字が書いてある。そして塩壺が置いてある。

山本 「色々注文が多くてうるさかったでしょう。お気の毒でした。もうこれだけです。

どうか体中に、壺の中の塩をたくさんよくもみ込んでください」

塩とは予想外だった。そうか、塩か。塩をもみ込めときたか。塩……、塩だって

……？

山本 どうもおかしいですね。

塩ってどういうことだ？

山本 二つ目の扉になって書いてあったか覚えていますか？

鈴木 なんて書いてあった？

山本 「当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこはご承知ください」

鈴木 なにが注文の多い料理店だよ。注文をつけているのは向こうじゃないか。

山本 それですよ。

鈴木 どれだよ。

山本 沢山の注文ってのは、向こうがこっちにする注文のことですよ。

鈴木 確かに注文は腐るほどあった。嫌気が差して途中でやめちまおうかと思っただけら
いだ。なんで向こうが注文をするんだ？ こっちは客だ。注文ってやつは客がす
るもんだ。

山本 さっきの扉もそうです。「料理はもうすぐできます。十五分とお待たせはいたしま
せん。すぐ食べられます」……これもです。

鈴木 なにがどうなんだ？

山本 「すぐ食べられます」っていうのだから、僕たちがすぐにご馳走を食べることが
できるって意味じゃなくて、僕たちが、すぐにご馳走として誰かに食べられてし
まうってことなんじゃ……。

鈴木 なんだって？

山本 ですから、西洋料理店というのは、僕の考えるところでは、西洋料理を、来た人
に食べさせるのではなくて、来た人を、西洋料理にして、食べてやると、こうい
うことなのでは……。

鈴木 来た人って……、そいつは、つまり……。
山本 つ、つ、つ、つまり、つまり、これは、ぼ、ぼ、僕らが……。 (ガタガタと震え出す)

鈴木 俺たちが……？ 俺たちが？ お、俺たちが？ (ガタガタと震え出す)

山本 逃げましょう。

鈴木 そうしよう。

山本 逃げましょうよ。

鈴木 わかってる。

八、第七の扉

二人の会話の間、再びお盆が廻り、別の扉が現れる。その扉にもまた文字が書いてある。

鈴木 ……扉だ。

山本 ……また書いてある。

鈴木 読めよ。

山本 嫌です。

鈴木 読めつて。

山本 読みます。「いや、わざわざご苦労です。大変結構にできました。さあさあおなかにお入りください」

鈴木 おなか？

山本 おなかって……

鈴木 扉の中ってことだろう？

山本 腹の中ってことじゃないんですか？

鈴木 なんてそうなるんだよ。

山本 おなかって言ったら腹の中じゃないですか。

鈴木 扉の中って可能性だって消えたわけじゃないだろう。

山本 扉の中だろうが腹の中だろうが、どっちも一緒じゃないですか。

鈴木 扉の中と腹の中と、どこがどう一緒なんだよ。

山本 知りませんよ。

鈴木 なんてだよ。

鈴木と山本は泣き出す。「けさの六時ころ ワルトラワラの」がフランス料理店の店内音楽風に流れ、舞台奥に山猫様の部屋が現れる。テーブルについている山猫様。召使いが赤ワインを持って登場。

召使い 早池峰の豊かな自然が育んだエーデルワインでございます。(山猫様のグラスにワインを注ぐ)

山猫 (飲む) もうまもなくかえ？

召使い 牛乳のクリームと酢をたっぷり和えました。まもなく山猫様の大好きなロシア風サラダができあがりです。

山猫 お塩をもみ込むのを忘れるでないぞ。

召使い 承知しております。

山猫 能天気な人間どもめ。森の怖さ、やっと思い知ったかえ。もう遅いがのう。ホーホホホホ。

召使い 様子を見て参ります。(扉の向こうから鈴木と山本を見る)おや……塩をもみ込んでいないようですね。

山猫 なぜじゃ？

召使い 気が付いちやったみたいです。

山猫 なにに気が付いたのじゃ？

召使い 自分たちが食べるために支度をしていたのではなく、食べられるために下ごしらえをさせられていたってことにでしょうね。

山猫 困るぞよ、ここまで手をかけて下ごしらえをしたのに。

召使い 山猫様の書きようがまずいです。あそこへわざわざ「色々注文が多くてうるさかったでしょう。お気の毒でした」なんて、間抜けなことを書いたりしたもんだから。

山猫 間抜けじゃと？

召使い 間抜けじゃないですか。

山猫 どこが間抜けじゃ、氣遣いじゃろうが。

召使い これから食べようって人間に、いったいなんの氣遣いですか？ 「お気の毒でした」なんて「今から食べますよ」って言ってるようなもんです。

山猫 もう良い。塩はいらぬからさつさと盛り付けをしておくれ。

召使い 素直にお皿に乗ってくれるかどうか……。

山猫 さつさとおし！

召使い 畏まりました。(扉の向こうへ行く)お客様方、早くおいでなさいな。もうすつかり準備はできておりますよ。お皿も洗ってありますし、菜っ葉もよく塩でもんでおきました。あとはあなたがたと、菜っ葉をうまくとりあわせて、真っ白なお皿に乗せるだけでございます。……駄目だ、こりや、ちつとも動きやしない。

山猫 お前、まだなの？

召使い はい、ただいま。さあさ、いらっしやいませ。それともサラダはお嫌いですか？ そんならこれから火を起こしてフライにしてあげましょうか。とにかく早くいらっしやいな。お好みの料理に仕上げてあげますから。おやおや、そんなに泣いてはせつかくのクリームが流れるじゃありませんか。

山猫 早く！

召使い 山猫様がもうナフキンをかけて、ナイフを持って、舌なめずりをしてお客様を待っていらっしやいますよ。さあ早く、こちらへいらっしやいませ。

泣き続ける二人の紳士。「剣舞の歌」が激しく流れるなか、遠くから犬の鳴き声が聞こえる。その犬の鳴き声は徐々に近づいてくる。

召使い 犬です、山猫様。

山猫 始末したんじゃないのかえ？

召使い 猛毒のトリカブトをたっぷりご馳走してやったんですけどね。(とトリカブトを取り出す)

山猫 お前、それはトリカブトじゃなくてニガヨモギぞ。

召使い ニガヨモギ？

山猫 トリカブトとニガヨモギの区別もつかないのかえ、このボケ！

召使い ボケですと？

山猫 お前なんかクビじゃ！ ボケ！ ボケ！ ボケ！！ わらわは犬は嫌いぞよ！
わらわは犬は嫌いぞよ！

山猫と召使い、バタバタと去る。「にやおお、くわあ、ごろごろ」と、犬と猫の死闘のような音が聞こえる。

九、深い森

「太陽マヂックのうた」が不気味に流れる。扉が消えると、そこは深い森の中に戻る。風がどうと吹いて、草はざわざわと、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴る。二人の外套や帽子や鉄砲やブーツなどがバラバラと置かれている。呆然と立ち尽くす鈴木と山本。遠くから、「旦那あ、旦那あ」という地元の猟師の声。

鈴木 ……猟師だ。

山本 ……猟師ですね。

鈴木 おゝい、おゝい、こゝぞ、早く来い！

山本 おゝい！

鈴木 (ほっとしたように山本の顔を見て) ……お前の顔、変だぞ。

山本 (ほっとしたように鈴木顔を見て) 先輩の顔も変です。

鈴木 まるでくしゃくしゃの。

山本 紙くずだ。

鈴木と山本、力なく互いの顔を笑う。「私は五聯隊の古参の軍曹」が静かに流れる。

幕